

# 幼稚園における「自然」の実際

お茶の水女子大学附属幼稚園

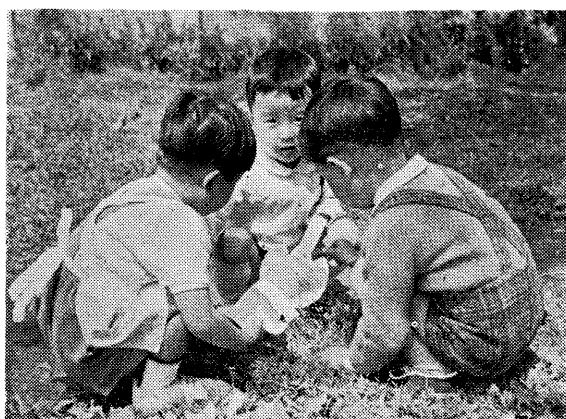
## 三才児と「自然」

村井トミ

三才児の「自然」について、昨年の経験の中からかくということであるが、いささか、とまどいせざるを得ない。年令が三才だけに他の保育内容の領域より一層むつかしく、漠然としたものであるからである。幼稚園の年令では主としてそうであるが、三才児は特にすべて教科的でなく「あそび」という一つの大きな目標の中に、あらゆる保育内容を少しずつはさんでいくという方針でやっている。それだけに「自然」を取り出して、これこれのことをしたということは言えないし、また言いたくないところである。

一般的の傾向として、三才児に限らず五才児でも「自然」ということに対して、何か目に見えたものをやなくてはならないというような考からか？ 少し行き過ぎているのではないか？ 球根を植えるにしても、さなぎの変化を見るにしても、やってはいけないのではない。大いにやってよいと思う。がその方法に無理があり、いずれ小学校で習うであろう理科を、程度をおとして教え込んでいるような感がする。細かい一つ一つの変化をメモしたり絵にかいたりして保育室にかけなくとも、先生や友だちと一緒に世話をしたりその変化におどろいたり、よろこんだりする。このこと自体が大切なことであろう。子どもは教えれば結構覚える。しかしそれだからと言つて早くおとなにしたてて立派な教育とは言えない。先是急がなくて、小学校で充分にやつてもらえるのだから——。いかに、こういう事に関心をもち、動植物をいくしむ気持を養うかが問題である。だから、

それだけに環境としては十二分の配慮がされなくてはならないし、教師自身も、自然に対する充分の学識をもち興味をもつてゐるようでなくてはならないわけであろう。



話がよこ道にそれでしまったが、三才児の問題にもどすことにする。

それならば三才児には「自然」はむつかしいから放つておくかというと、そうではない。三才は三才なりに、身近なものを見たり、動植物をかわいがつたり、いろいろの物を拾つたり集めたり、指導要領にもかいてある最初の方の項目は、最少限に必要である。

これらのことは、すべて幼稚園生活の中、あそびの中に、それこそ自然に出てくるものであるから、反面から言うと教師も子どもと一体になって、動物を見たり、虫をつかまえたり、根気よく花びらを集めたり、庭の石を拾つたりというように、充分に自由あそびをさせることであるとも言えよう。つまり、「自然」ということに、まっしづらに取りくまず、生活やあそびの中で教師が機をとらえ、扱うということであろう。

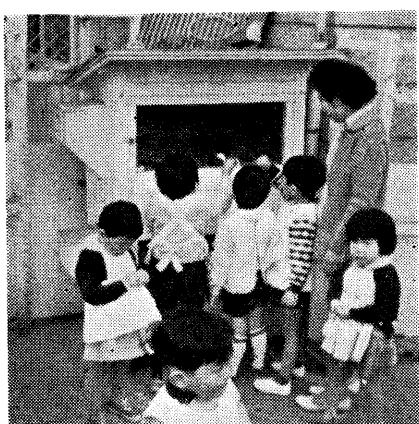
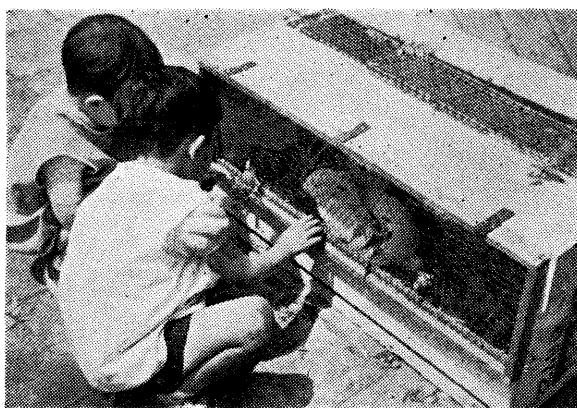
こういうことをしている中に、自然に形とか色とか、硬いとか、やわらかいとか、大き

いとか、小さいとか、重いとか、軽いとか、兎やにわとりが、どんな草が好きでよく食べるとか、いろいろのことを次第に理解していくのである。

私の園でも例外ではなく、兎や小鳥や、にわとりや、モルモット、金魚などを飼っている。私は子どもと充分にこれらでたのしんだ。あのヨチヨチした小さい子が、朝、顔を輝かせて新聞包をもって現われる。何かと思うと人参が大切に包まれていて、兎にやるのだということも、しばしばあつた。家に帰つても、あの兎のことを忘れないのだと思うと何かほんのりと心あたたまる思いであり、これでいいのだ、これでいいのだと、心でつぶやいたりした。

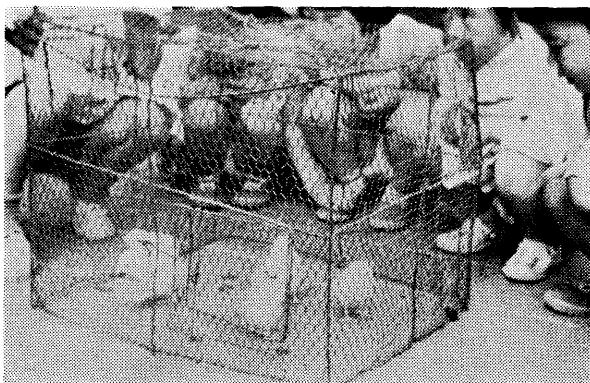
こうやって動植物をかわいがる気持の一方に、金魚やお玉じゅくしを手づかみにしたり、きれいな花を惜しげもなく折つたりするのも三才児である。それも二学期頃には次第になくなつてはくるが……。

花びらや木の葉もよく拾つた。めいめい簡単な手さげをつくつてから、うたいながらよく拾つてあそんだ。この「花びらを拾う」こ



の中にも、製作あり、自然あり、言語あり、音楽あり、健康あり、社会あり、すべてが一体となって含まれているのだと思うと、ただのあそびの一種類というよりも、もっと深い意味があると思われて、充分にあそばせようと思うのである。

また、春秋の遠足の他に、よく散歩につれ



出した。大学のグラウンド、ヘルスセンターのそばの緑の芝生、金魚の浮んでくる池、ころどングリの落ちている雑木の下など、思いきりかけ廻り、ゴロゴロころがつた。蝶々を追いかけたり、バッタを探したり、途中で見つけた蟻の行列に大半の時間を費したり、思えばあの小さい人たちと過ごした、たのしい時が次々によみがえつてくる。

これらのことは、子どもの生活の中に、当然生れてくることであるから、教師としては環境を充分に与えてやること自体が大切なことであろう。

もう一つの面は教師自身の中にあるといつてもよいことで、「子どもの質問を大切にしてやろう」ということと「子どもから生れた科学的の芽生えを大切にしよう」ということである。

三才では科学の芽生えなど、何だか大それたことのようだが、よく見ると小さいながらにひそんでいることがある。大きい積木などでなかなか考えてすばらしいロケットをつくったり、なるほどと思うような乗物をつくったりする。自動車のハンドルをうまく工夫し

たり、穴のあいた組木や棒でよく動くものをこしらえたり、汽車の坂道などおもしろくなったり、こんなこともみんなおろそかにはできない。こんなこともあった。黄色いラケットを室の入口で持っていた子が、ドアの外の陽のあたる所と、ちょっとひっこめた室の陽の当らない所とで、その黄色の色が、とても違うことを発見して、何度もくり返しやっていたことがあった。また、青い空にくつきり描かれたヒコーキ雲に眼をみはり、おべん当の時など、スフーンにうつる顔が話題に拡がつたり、天上にうつった七色の光におどろいたり、先生の使うちよつとした道具、ホーチキスや穴あけ具などに夢中になつたり、数えあげれば、幼いなりに、おどろきや、よろこびや、工夫があつた。

これらを教師は細心の注意で観察し、具体的な機会があつたら、友だちにも知らせると共に、よろこびもおどろきも、子どもと共感し、必要によっては助言も助力もおしまないということである。

質問を大切にすることは、ここで改めてのべるまでもないが、あの三才児のたわいない質問に根気よくこたえ、相手になってやるこ

とが大切であろう。

もう一つ気をつけなくてはならないと思うことは、このように自由なあそびや、生活の中から経験し、得ていくことが多い、この

「自然」では、幼児のみにまかせておくと、うつかりすると一方的になり易く、個人差が大きくなるということである。もちろん、幼稚園では個人の指導ということが大切なことはあるが、落ちこぼれの子のないよう、教師は子どもを充分に誘導して、多面的に経験の場を（あそび）持たせるということが大切ではないかと思う。

昨年の一年間を三才児と共に楽しくあそび、家庭的な雰囲気で過ごせたことは、本当にうれしいことであった。

今考えると、とりてて「自然」にとりくんだわけではなかつたが、三才なりの過ごしかたはしてきたつもりである。

子どもたちは自然の中で生活して、自然の中で育っているので、自由に遊んでいる間に自然に属する遊びが非常に多い。このため自然では、自由遊びの中での指導が重要になつてくる。自然に親しませ、自然への興味を深めるために、自然の中で子どもたちをのびのびと遊ばせるということを第一に考えた。次に自然の指導では、直接経験によることが望ましいことなので、環境が大切であるということは言うまでもない。環境と言えば当園は幸いに、自然の山があり子どもたちは、毎日毎日この山をかけまわって遊んでいるわけであるから、この恩恵に浴するところが多いとい

子どもたちの日常の生活の中には、子どもたちが自然の中で、自然に親しみを持ち、自然に愛情をもつて楽しんでいる、いきいきとした姿が見受けられる。

自然の指導をどうしたらよいかなど、自然だけの領域を取り上げて言うのは、無理であることは当然であるが、昨年受け持つた四才児が一年間、自然に関係あることでは、どんな活動や経験をしたり、どんなようすであつたかを取り出して、ふりかえり考えてみることにする。

子どもたちは自然の中で生活して、自然の上でのつみ草のできる所で、夢中で草をつんではクローバーを首飾りにしたり、はこべ・クローバーなどをつんでは、園庭に飼育しているモルモット・うさぎ・にわとり・小鳥などに草を食べさせて可愛がつっていた。どうして幼稚園では子どもたちが自由につんでよい、いわゆる雑草園というような草原があることが望ましいことになる。飼育しているモルモットなどでも、子どもたちが、草、にんじん、果物の皮など食べさせているので、えさをやりすぎて死ぬなどということがなければと、心配されるぐらい、変りばんこにえさを与えていた。幸にモルモットはえさをたくさん食べさせても、自分で必要な分だけ食べる

ので、幼稚園などでは飼育しやすいもの一つである。もう少しモルモットがなれて、子どもたちが自由に抱いて遊ぶということができるようになれば、もっとと効果的であ

わなければならない。

## ○一学期

時期をおつて思い出してみると、四月頃は入園した子どもたちも、昨年からの子どもたちも、園庭で春の日ざしをいっぱいあびて自由に遊んでいる。この自由遊びの時に、山の